

シスモンディの再生産と富の概念：アニーキンのシスモンディ評価に関連して

桂木，健次

<https://doi.org/10.15017/4474722>

出版情報：経済學研究. 41 (1), pp.19-33, 1975-12-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



シスモンディの再生産と富の概念

——アニーキンのシスモンディ評価に関連して——

桂 木 健 次

目 次

はじめに

1. シスモンディ経済学の視座
2. 富と労働——「価値」
3. 「資本と所得」概念と再生産
4. むすびにかえて

はじめに

シモン・ド・シスモンディが古典派経済学(économie classique)に疑問を感じ、その終末と経済学の再建とを提唱してから、ほぼ一世紀半をこえる歳月がすぎた。彼の生誕二百年にあたる1973年を前後に再びいくつかのシスモンディ研究が公けにされたが、その中でもソヴェトのア・アニーキンが発表した論文「シスモンディと経済学発展における彼の役割」¹⁾は検討にあたいする幾つかの論点を含んでいるように思われる。本稿ではアニーキンが提出し評価した論点のうち、富の形成にかんするシスモンディの見解のみをとり出し、再検討してみたい。

周知のようにデカブリストのペ・イ・ペステリがシスモンディ『経済学新原理』の影響もうけて「農民解放」について問題提起を行ったのは、早くも同書刊行の年末から翌年にかけてのことであった²⁾。これを皮切りにシスモンディはいろいろのかたちでロシア人たちに注目されつづけてきた³⁾。レーニンもまた、ロシア・ナロードニチェストヴォを批判する視座との関

連でシスモンディ経済学を問うている⁴⁾。彼のシスモンディ評価はナロードニキへの評価に関連させて「二面的」になっていることは周知のとおりである。だがシスモンディ経済学の全体的評価という観点からみると若干の問題を残すものであった⁵⁾。といっても、レーニンは社会科学におけるシスモンディの功績に目をそむけていたのではない。アニーキンの指摘を待つまでもなく、彼は、それを三点にわたって表明している⁶⁾。そのうち第一点目は、彼が「勤労諸階級の見地に立とうとしている」点である⁷⁾。つまり、大量の小生産者が苦悩しつつ分解していく動態的な生成と発展の制度として資本主義が彼シスモンディによって把握されているという点である⁸⁾。この点はまさしくシスモンディの再生産と富の概念にかかわる視座の問題であり、ロシア経済思想がシスモンディ経済学のなかに何をみたのかという主題を解き明かすうえにも、今日のわれわれに多くの重要な示唆をあたえてくれるものと思われる。

シスモンディ経済学の学史的意義づけについては、これまでのところ二つの主だった評価が与えられている。その一つは小生産者経済からなる「自然的秩序」へのロマン主義的逆転の経済論であるとする評価であり⁹⁾、いま一つはシスモンディ経済学の中に経済成長—有効需要の創出というケインズ的問題意識の萌芽をみようとするものである¹⁰⁾。こうした諸論はそれなりに重視すべき指摘ではあるが、彼にはまた、不

平等な富の分配と市場の閉塞を脱却して連帯に基づく国民経済の均衡的發展を回復しようとしたアプローチもあることを忘れてはならないであろう。彼はといえば、市場均衡、すなわち「交換価値（商業的富）」のタームでしか存在しえない資本主義経済の需給構造を解明の対象としたのではない。彼は社会均衡（効用生産とその全市民的享受）が市場均衡を根本的に制約するものとして経済をとらえ、その見地からこれを批判するのである。このところにこそなによりも注目したいのである¹¹⁾。

本稿は以上のようなシスモンディの示唆に導かれながら富の形成（再生産論）に関する彼の見解を紹介しつつ、その特性の意義づけを試みたものである。

注

- 1) А. Аникин, Сисмонди и его роль в развитии политической экономики (к 200 летию со дня рождения), «Вопросы Экономики», No. 6, 1973, стр. 14~16. アニキンの論文について以下の紹介がある。見野貞夫「古典経済学のもう一人の完成者：シスモンディの生誕二百年——ソヴェト経済学者の一論文から——」『山口大学経済学雑誌』第22巻第3~4号、昭43、109~124頁。
- 2) F. Venturi, *Roots of Revolution, a history of the Populist and Socialist movement in 19th century Russia*, Weidenfeld and Nicolson, 1961, p. 4; Г. П. Щитрова, *Декабристы и Сибирь*, Томск, 1962, стр. 11.
- 3) Н. Г. Чернышевский, *Капитал и труд* (начала политической экономики, сочинение Ивана Горлова), том 1, С.-П., 1859, «Избранные Экономические произведения» том. 2, 1948, сср. 333~334; J. H. Billington *Mikhailovsky and Russian Populism*, Oxford Univ., 1958, p. 68.
- 4) В. И. Ленин, *К характеристике экономического романтизма*, «Полное собрание сочинений», том. 2, 1967, стр. 119~262.
- 5) ヤヌスの神に見たてた評価である。拙稿「若い

レーニンの歴史と経済認識にふれて」九大経済学研究科『経済論究』28号、昭42、44~45頁。なおこの論文の二三の不備を指摘いただいた倉持俊一氏にこの紙上をかりてお礼を申したい（史学会『史学雑誌』第82編第5号、昭43、341頁）。

- 6) Ленин, там же, стр. 126, 131, 170.
- 7) Аникин, там же, стр. 17.
- 8) Ленин, там же, стр. 126.
- 9) 堀新一『フランス経済思想史』風間書房、昭39、167頁。
- 10) 岡田純一『経済学における人間像』未来社、昭44、176頁。
- 11) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, 3 édition, tome, II. Edition Jeheber, Genève-Paris, 1951, pp. 232~233. 菅間正朔『経済学新原理』（下）、日本評論社、昭25、257~258頁。

1. シスモンディ経済学の視座

周知のように、シスモンディは、自分の立場をまずスミスへの回帰によって明らかにしようとしている¹⁾。「われわれはスミスとともに労働 (travail) が富の唯一の源泉であり、節約を富の蓄積の唯一の方法であると主張する。だが、われわれは享楽 (jouissance) が富の蓄積の唯一の目標であり、国民の享楽の増大がともなわれる時にだけ、国富の増大が存在するのであると付け加える」(I. pp. 67-68, (上) 78頁)。スミスは富を「それが生活せしめ幸福にすべき人口との関係」で考察しようとした²⁾。

シスモンディはスミスのこの主題を継承するのであるが、そこにはすでにつきの二点において、彼特有の視座がにじみでているのである。

その一つ。シスモンディはスミスとは時代や課題を異にしていた。シスモンディが直面した現実とは以下のものであった。節約による資本創出と増大が国民全体の富裕の増進に結果せ

ず、富者が以前には貧者に所有されていたものの大部分を自分のものにすることによって、その私的な富を増大させている (I. p. 67, (上) 79 頁)。自由競争の結果は、私的な富の増大と反面における「多くの個人の甚しい圧迫と貧困、さらに多分富の増進それ自体による普遍的貧困 (恐慌)」である。ヨーロッパ「商業体制」全体に目を転ずれば、自由競争のもたらしたものは「消費と何の関係もない生産の際立った増加」であり、「各国民の孤立化」である (I. p. 329, (上) 328 頁)。19世紀のヨーロッパ諸国政府はスミスの時代と異ってこうした「事態の悪化」にたいし積極的に干渉すべきであり (国家の調整的・緩和的活動)、国家は経済組織における摂理の業を助け規制する必要がある (cf. I. p. 30, 67, (上) 30, 79 頁)。

その二。このことはシスモンディがスミスと時代を異にしていたということだけにとどまらない。「政府 (国家) の干渉」を主張するシスモンディの論理のなかには、実はケネー以後のフランス経済学思想原理 (神の摂理にもとづいた人間の享楽概念³⁾) がうけつがれていたということである⁴⁾。為政者にとって「真に問題」なのは所与において人類に最大の幸福を保障すべく、富と人口との間に「結合」と「均衡」を見出すことでなければならない。抽象的に思考されるような一国の富の蓄積が目的ではなく、「物質的な生活の享楽への全市民の参加」において富が問題とされなければならないのである (I. p. 38, (上) 46 頁)。従って政府の目的は「強者に対する弱者の保護者」「全体の永続的で冷静な利益の代弁者」におかれている、と (cf. p. 67, (上) 79 頁)。こうしてシスモンディの経済学は「社会の福祉の学」となる (I. p. 33, (上) 41 頁)。彼は政治経済学を定義して、

所与の国家で最大多数の市民が最高度の物質的福祉に参加しうる方法を探求し、これを国家によって実現せしめるものであるというのである (cf. II. p. 168, (下) 190 頁)。

このことをいいますこしみておこう。

国家学はその目的たる「一般的福祉」に到達するに政治学と〔政治〕経済学との二大部門に分かれるが (I. p. 37, (上) 44-45 頁)、経済学は国家学 (立法の科学) 固有の「二重の目的」に規定されて成立する「国富の真の管理」の体系なのである (I. p. 38, (上) 45 頁)。その二重の目的とは、人間性質と両立しうる最高度の福祉を彼らに獲得せしめる方法を探求すると同時に、出来るかぎり最大限の個人をこの福祉に参与せしめる方法を探求することである (I. p. 33, (上) 41 頁)。従って、政治経済学は富者にとってもまた貧者にとっても同様に有利で完全な「社会組織」を補正しつつ維持することを教えるものであって、それを覆えすことを教えるものではないのである (I. p. 39, (上) 47 頁)、それは、社会的に結合された人間〔市民〕の幸福をその課題とする国家学の体系化の一部門になるものである (I. p. 33, (上) 41 頁)。つまり経済学は、人間の物質的福祉が政府の仕事となることによって、その学的対象を獲得するのであり、政府に国富の正しい管理法を教える学問であるというのである (I. p. 38, (上) 45 頁)⁵⁾。けだし、人間の物質的欲求は富によって充足されるが、この富とは「労働を支配し、配慮を購い、人が自分で使用するため、または自分の享楽のために必要なもの一切を獲得させるもの」なのであるから (I. p. 37, (上) 45 頁)。

以上がシスモンディ経済学の視座ともみなさるべきものである。これはまさに、社会の目的 (人間および人間社会の義務) を「地上への幸

福の侵透」において考え、この目的に順ずる経済均衡を意図する彼の社会観に裏づけられた提言であると言えるだろう (II. p. 193, (下) 217 頁)。シスモンディはまた「国家の管理」としての経済学を「事実を正確に観察する方法」にもとづいて構築すべきことをも主張している (I. p. 64, (上) 75 頁)。その見地からみるとリカードの『経済学と課税の原理』(1817 年) は、上述の二重の目的 (最大限の福祉を得せしめる社会組織の方法およびこの福祉への全市民の公平な参加方法の解明) のうち、前者の面だけを巧緻化している点で不備であり、今日の古典派の陥っている「新しい方向」(経済学の技術化・数量・形式化) の欠陥をまぬがれないものである⁶⁾ (I. p. 70, (上) 82 頁)。この批判は、リカードによる経済現象の合理的な追求の方法 (理論方法)、従って彼の資本蓄積論の意義を十分に評価しえず、経済学の自立性を見過したことに通じるのであるが、こうした限界にもかかわらず、後述のようにシスモンディは、国民経済再生産の動的把握において無視しえないいくつかの興味ある論点を提唱しているのである。それは、ロバート・オーウェンらユートピア社会主義者とともに、資本主義経済そのものの内的批判にせまる論理として、経済改革のユートピアを打ち出している (cf. II. p. 234, (下) 299-301 頁)⁷⁾。

ともかくシスモンディは、分配論を〔再〕生産論との関連で説明すべきことを提唱する。彼は富と人口との関係というスミスの規定を継承しながらも、究極的に富の尺度を効用に求め、効用が再生産の目的をなすフランス派古典経済学の自然法思想に立っていた⁸⁾。因にスミス (古典学派) を生産と需要 (消費)、販売と購買との間に均衡と同一性を見る「円環的認識」

(中野正教授) にあったと規定すれば、シスモンディの場合は、生産—所得—消費という関連設定に立って、「消費は決して生産の必然的結果ではなく」、また市場の梗塞は現制度の不可避的な結果であると見さだめていたのである (I. p. 280, (上) 412 頁)。この認識は、中野教授の指摘されているところであるが、均衡と調和の関係を理論的に措定した上で、資本主義生産に固有の動向 (生産と消費〔所得〕との背離、所得と分配の不均衡) を解明している点で特徴的である (I. pp. 88-89)⁹⁾。なお、このシスモンディの調和と均衡の関係論は、史的には小商品生産者、家長制農耕制度の中に神の摂理に合致した理念型社会 (「自然的秩序」) の原型を回顧することによってえられたものである (II. p. 243, (下) 301 頁)¹⁰⁾。だがそれは、後にも検討するように、現実には発展しつつある社会状態 (再生産条件) のもとでの均衡論としてポジティブに提出されていると言えるのである (I. p. 108, (上) 120 頁)¹¹⁾。

ついで注目される点は、交換と資本の背後に富の不変的・普遍的源泉としての労働 (travail) を、「産業勤労 (industrie)」すなわち「労働力能 (aptitude au travail)」として把握しているところである (I. p. 71, (上) 84 頁)。「ひととは生れるにあたって、生きるためには満足させなければならない欲求と、ある程度の安楽によって幸福を彼に期待させる欲望と、彼にこれら両者を満足させるところの勤労、すなわち労働力能とをもって、この世に来るのである。この勤労こそ彼の富の源泉であり、彼の欲望と欲求とが、彼にそれを使用させるのである」 (I. p. 108, (上) 84 頁)。これは彼の再生産論の冒頭を飾る言葉である。いわば再生産一般論の骨格をなしており、効用の生産とその享受として

資本主義生産の胎内に発展している不変的生産力、富形成の条件をさしているのである。シスモンディはこの産業勤労が資本主義的生産一領有形態と対立矛盾する存在にあると指摘し、この「固有の矛盾」の現象として「市場の梗塞」（恐慌）ならびに「豊富の真只中の貧困」が発生すると把握するのである¹²⁾。そのため彼はまず「孤立人」をもちだし、そのもとの富形成の条件を考察することによって、市民的人間の経済活動の基底的条件を浮び上らせるのである¹³⁾。すなわち彼は、この「固有の矛盾」を単に経済表象の分析基準として導出しているのではなく、さらに資本蓄積の機構そのものに対する批判の基準ともなっているのである。彼にとって、一国民が「真に繁栄」する必須条件は、「すべての市民」が単に「絶対的生活必需品」だけでなく「生活の享楽」をも彼の労働によって獲得されることが保障されていることを意味し、富とはまさしくその「表象」であるにすぎない（I. p. 244, (上) 248-249）。シスモンディ経済学は「勤労諸階級の理論（視角）」に立った資本主義的再生産に対する内在的批判の学とでも言えようか¹⁴⁾。

注

- 1) 中野正「シスモンディ」『経済学説全集』河出書房、昭29、第4巻、102頁。堀新一『前掲書』255～256頁。岡田純一『前掲書』168頁。吉田静一「シスモンディ経済学序説」（内田・小林編『資本主義の思想構造』岩波書店、昭43）、149頁。
- 2) 中野教授はシスモンディ体系を経験がスミスの体系に修正を加えることを余儀なからしめているものとして評価され（『前掲』102頁）、吉田教授は「旧い体系の新しい見方」としてシスモンディを評価しておられる（『前掲』148頁）。岡田教授は「旧い体系に対決して新しい見方」と言われる（『前掲書』169頁）。
- 3) 享楽(jouissance)概念はフランス古典学派に特徴的に見られる（中野「前掲」103頁）。これは

富の基準を使用価値に求めたボアギューベールにおいて早くも見られる（J. モリエ『フランス経済理論の発展』未来社、昭37、43頁）。堀教授はシスモンディがフランス学派に通じる第一の特徴として、経済学の出発点を欲望におき、労働にこれを充足する手段をみるところを指摘される（『前掲書』170頁）。吉田教授はボアギューベール→重農派→シスモンディを貫く視点を「国民の福祉」論にみている（『前掲』142～143頁）。

- 4) 堀新一『商業思想史』新紀元社、昭36、111頁。
- 5) シスモンディによると、人間「市民」は精神的および物質的欲求を感じずる混合的存在であり、その達成すべき幸福（福祉）も精神的条件および物質的条件から成立している。人間の精神的幸福はそれが政府の仕事となっている場合、政治学の目的をなす。他方、人間の物質的福祉は、それが政府の仕事となることのできるかぎりでは、経済学の対象をなす、といっている（I. p. 37, (上) 45頁）。
- 6) Аникин, там же, стр. 23, 堀新一『前掲書』171頁、岡田純一『前掲書』194頁。
- 7) エリック・ロールは社会主義の開拓者の一人としてシスモンディの名をあげている（邦訳『経済学史』上巻、有斐閣、昭26、305頁）。
- 8) エミール・ジャム（久保田・山川訳）『経済思想史』上、岩波書店、昭40、70頁。なお中野教授はスチュアートの「需給ノルム自律性」批判がシスモンディによって批判的に継承されていると指摘されている（『前掲』108頁）。
- 9) 中野「前掲」124頁、岡田純一『前掲書』245～250頁。
- 10) シスモンディの「自然的秩序」概念はフランス学派に固有の含蓄をもつものであって、「一つの理想」を表示する規範カテゴリーとして理解されるべきであろう（ジャム『前掲書』70頁、98～100頁）。
- 11) 岡田純一『前掲書』176頁。
- 12) Аникин, там же, стр. 19.
- 13) Sismondi, op cit, tome I. pp. 81～84, (上) 95～98頁°
- 14) K. Marx, Theorien über den Mehrwert (4 Band. des "Kapitals") 《Werke》, Bd. 26-1, S. 264 (『全集』第26-1巻、342～344頁)。

2. 富と労働——「価値」

まず、シスモンディの富概念をみておこう。

「いくたびその指摘を繰り返してもよいことであるが、富は、決して社会の目的ではないのであり、それはその目的を達成するための手段であるにすぎない」(I. p. 207, (上) 399頁)。ただし、富とは「生活の楽しさと安易さとの表象」であるにすぎないからである(I. p. 285, (上) 290頁)。従って、生活の福祉「最善社会」とはなにかを問い、その条件を設定し、そこから資本主義経済(再生産)の事実認識とその検討をおこなうのである。そこで彼はまず第一に、主体に「勤労する人間」(それも感情、欲求および情熱をもった社会的に結合された人間)＝市民を措定する。この市民としての人間にとっての生産成果を効用と享楽一福祉一の問題として把握しようと試みる。いうまでもなく勤労する人間は資本主義私経済の下では「労働する人間」である。労働者の基底に勤労する人間という不変の実体を見定めるために、「孤立人(solitaire)」を想定し、この孤立人が交換を通して「社会的に結合された人間」(市民)であるということを論証する。そこからふたたび資本主義経済の再生産構造の中に組み込まれている労働主体の論理措定を行うのである。

スミスの「市民」概念(主体措定)はすでにシスモンディによって大きく変容させられている。スミスにとっては、商品生産の全面開花した「普遍的富裕の社会」(商業社会)、すなわち資本主義社会の機構解明の原理が市民的個人であった。従って、スミスの主体措定とは経験的な庶民のなかの一人として社会的平均人である「理念型市民」であったのである¹⁾。

シスモンディの主体措定の意味内容をみてみ

よう。それは『新原理』第2篇「富の形成と増進」のなかで主に表明されている。

(1) 「孤立人」における富の形成

富とは、シスモンディにとっては、①産業勤労によって創出され、②蓄積のために節約され、③欲求または欲望を充足するために消費される、という三条件をかね備えた財をさす(I. p. 71, (上) 84頁)。つまり、富は交換表象、貨幣なしに、いかなる交換可能性なしに、すなわち商業なしにも存在しうが、他方「労働」なしには存在しえず、またこの「労働」の充足せしめるべき欲求と欲望なしには存在しえないものである(I. p. 71, (上) 84頁)。一言でいうと、シスモンディの富概念は、効用(享楽)のために生産される財を意味している。従って「富の尺度」は本質的には「交換によって得る価格」(＝交換価値)では決してない。人間が充足しうる欲求の大きさ(効用)あるいは人間が再び新たな労働に頼らないでも自らの勤労の成果によって生きていけるだけの期間(将来に向けて充たしうる労苦時間)のいずれかが富の尺度となる(I. p. 72, (上) 85頁)。富は「人間の欲求充足のためにその生産に費した労苦(peine)に等しい価値」のものであるともいえる(I. p. 75, (上) 89頁)。この「費された労苦」が投下労働量を意味することは言うまでもないが、シスモンディは、それが欲求充足(効用)を度量するものであると把握しているのである。また「労苦」という用語はただ生産的・富創造の労働のみを指示している。(I. p. 75, (上) 89頁)。

この点について少し立ち入ってみよう。自然は無償では人間に何ものをも与えるものではない。人間が自然に「呼びかける」時にこそ人間に協力し自然の諸力を限りなく増大させようと

する。またその呼びかけ（創造する労働）は、それが「人間の享樂を充足する目的」（消費と節約）をもつものでなければならない。もしそうでないならば、その生産物は富とは言えないのである（I. p. 74, (上) 87頁）。労働はまた自然的対象にも価値を与えて富となす。労働は直接的であるだけでなく間接的たりうる。人間（孤立人）は草原を囲んだ芝生、家畜を繁殖させた牧場、挽臼を廻す水流に価値を付与し、また、家畜のために刈入れた枯草にも価値を付与する（I. p. 74, (上) 88頁）。

以上のようにシスモンディは、「欲求充足」に奉仕する労苦（労働）を「生産的労働」（富創造の労働）と呼び、こうした労働のみが、富（効用）の尺度となると定義している²⁾。投下労働説はここでは効用価値説の見地から再構成されようとしているのである。再生産把握との関連で、このことをつぎに確かめてみよう³⁾。

（2）富の社会的形成

富の生産は実体的には社会的に結合された人間（市民）によってになわれている。シスモンディによると、人間の社会的結合は交換と分業に基礎をおき、この社会的結合（社会的交通）こそが人間が相互に用益の交換をおこない享樂し休息を実現しうる社会的場である（cf. I. p. 76, (上) 90頁）⁴⁾。分業と交換で結ばれる社会的結合の論理がスミスにみられることはあらためて指摘するまでもない⁵⁾。シスモンディも同じく、人間は交換によって社会的結合にはいり、また交換と分業とがこの結合を保証するというのである。だが、交換は余剰（surabondance）から生じる、あるいはそれを前提として展開する（I. p. 76, (上) 90頁）。この余剰分は、さしあたりは現在の欲求の犠牲、将来へのくりのべとして現われるが、交換を通じて有

用となる。つまり価値をもつようになる。孤立人のもとでは、すでに考察したように、現在効用はそれに費した、あるいは費するであろう労苦と期間とにパラレルであった。だが、交換社会では、人間は自分の富と欲求とが条件つきのもの、「超感性的存在」たる社会の一部になる。孤立人が自分自身的手段や彼自身の欲求について持っていた認識がいまや、社会的人間がそのために労働する「市場の認識」や「需要あるいはその大いさ」についての認識にとって代えられる。そのもとでは、その余剰分にたいしもう一つの社会的価値が与えられることになる。と同時に、その交換に付せられる余剰財の尺度は、当座の効用ではなく、その生産に要した自らの労苦時間の評価（売手価格）と自分の必要財を自ら生産する場合の労働時間（買手価格）とに基づいて成立するところの価値によることになる（I. pp. 76-77, (上) 90頁）。それだけでなく交換の普遍化とともに、財の尺度（価値）にたいして効用は何の関係をももたなくなり、ただ労苦時間のみが価格の基準を規定するようになるのである。

みられるように、シスモンディの価値規定は、効用視点と価値視点との混在である。岡田教授はシスモンディ価値論の展開とその完成については1837～38年に発刊される『経済学研究』に待たねばならないと指摘されているが⁶⁾、それはそれとして、一応のまとめをしておこう。シスモンディが効用と労苦とをいかなる関連で把握しているかの詳細は別としても、孤立人にとって効用と労苦とはパラレルであり、その規定的な要素は効用にあつて、労苦はそれを度量する補足的な手段という関連にあつた。だが、交換社会ではこうした関連がこわされるというのである⁷⁾。

ところで、シスモンディは、交換が労働そのものに及ぶ事態をも説明している (I. p. 77, (上) 91頁)。それを彼は次のような見地とからめて捕捉しようとしている。すなわち、交換と分業による富の増進 (労働生産力の増大という生産力効果) 視点と、余剰分の有用化を契機とする享楽の増大 (消費効果) の視点からである (I. p. 78, (上) 93頁)。

④分業の生産力効果；——スミス『諸国民の富』第3編第1章の叙述に従って、「^{メチエ}手工業の分業」を次のように言う。「農夫はやがて蹄鉄工が彼のために一日で作る全農具をまる一月もかかって作るには及ばないととった」 (I. p. 79, (上) 93頁)。この分業の原理はさらにこれら^{メチエ}仕事を果てしなく細分化し、「各自はその受持ちの仕事を簡単にすることによって」、労働生産力を大きく増大させたのである (I. p. 79, (上) 94頁)。分業はまた機械を発明させている。これが分業に関する彼の第二の注目点である。つまり、分業は一切の労働操作をはるかに単純化し、工場内部で労働者に「単一操作」を担当させる。やがてその労働者は、この操作の「同一の運動形態」を間もなく自然諸力 (水、風、火) にゆだねて自分の代理にし仕事を遂行させるように、その改良につとめる (I. pp. 79-80, (上) 94頁)。こうして分業から機械発明と採用の根拠を説明した彼は、このことによって科学の適用が、人間の持つ生産能力を著しく増大させることを説明していくのである (I. p. 80, (上) 95頁)。

だが彼は、分業が資本主義のもとでもつ今一つの作用を無視しているのではない。第4編第7章「分業と機械について」はこの面をとりわけ抽出して、提唱するのである⁸⁾。

⑤消費効果 (享楽の増大) ；——分業による

生産諸力の増大はまた消費にたいしても多大な要求を生み出している。社会的人間の行う労働は彼に無限に変化しうる享楽を生み出し、故に彼の欲求は「無限なもの」として現われる (I. pp. 81-82, (上) 96頁)。富には無限な使途があるとも思われている。だからと言って、「消費が常に無限の生産を消費しうる限界のない力である」と想定することもまた誤りである。大部分の経済学者の陥っているのはこうした公理であって、これは、彼によって、「大きな誤謬である」とされる (I. p. 82, (上) 96頁)。シスモンディによると、このことは、生産に従事する生産的労働者の一大集団が、生産力の増大にもかかわらず、全般的に「貧困」を生みだしているという事実、従って余剰労働が、奢侈品生産にあてられているという事実にかかわる問題としてとらえられるのである (I. pp. 82-83, (上) 97-98頁)⁹⁾。

(3) 資本主義的再生産

交換と分業の社会は「均衡と調和」の国民経済を形づくりはしたが、資本主義の成立とともに、労働者は従属的地位 (労働する者と休息する者との分離および前者の後者への従属) と貧困・低賃金のミゼラブルな状態、従って欲求の限定とを強いられている。つまり、「資本家と労働者の連帯の原理」は破壊されている。そしてまた労働者の余剰労働はことごとく奢侈品の生産に向けられている。けだし、余剰労働の増加分は、労働者の欲求が制限を受けていること (労働者の低賃金は国民的利益に反する)、もともと社会の当座の必需生産物の消費には限度があることの理由から、有閑の富者の奢侈や享楽を結果としてもたらさざるをえないからである (I. p. 85, (上) 98頁)。

資本関係の本質をシスモンディは、社会的人

間として行う労働者の労働が他者（富者）の休息のために従属化させられているという性質にみている（I. p. 86（上）99頁）。労働者は富者によって自らの汗の結晶が蓄えられるのを知るのであるが、彼が自ら消費しうる限度以上に一層多く無限に生産する瞬間から、彼の生産物は、生産的労働に全く従事しない者の消費にあてられる。つまり資本主義の富は、「その所有者が手を下すことなしに、他人労働によって再生産される」という性質をもつにいたる、と彼は結論づける（I. pp. 85-86,（上）99頁）。富はいまや、「資本」という形態規定をうけとり、その果実＝「所得（revenu）」を生む（I. p. 86,（上）99頁）。

シスモンディは富の源泉を労働に求めている。この労働の生む富が資本主義のもとでは資本および所得（利潤）という「第二次的富」の形態を受けとる、というのである。そして富、すなわち効用の再生産は、資本の回転という運動形態において考察される。なぜそうなるのか、そのことの説明は次節にゆずろう¹⁰⁾。

注

- 1) アダム・スミス（大内・松川訳）『諸国民の富』岩波書店、第三分冊、151頁。このスミスの視角については、岡田純一『経済思想史』東洋経済新報社、昭45、76～77頁、内田義彦『経済学史講義』未来社、昭36、177頁、吉家清次『利潤論』同文館、昭49、39頁を参照。
- 2) こうした視点に対するマルクスの批判についてはスミスについて言及した『剰余価値学説史』第四章「三」を参照（K. Marx, ebenda, SS. 125～144）
- 3) 岡田純一『前掲書』78頁、同『人間像』215～221頁。
- 4) 内田義彦『前掲書』165頁。
- 5) 中野正『前掲』109頁。
- 6) 岡田純一『人間像』215～221頁、なお、K. Marx, Grundrisse, SS. 743～744（邦訳、高木（幸）監訳『経済学批判要綱』大月書店、第四分

冊、昭37、824～829頁）を参照。

- 7) シスモンディは商品価格（価値）をそれに要した生産要素への報酬（所有権に基づく生産参加への報酬）から説明しているようにも思われる。「すべての商品の価格はそれに要した労働に対する直接の割合で成立するのではなくて、この年労働と、高価な材料によって工場をたて機械を建造するためのものはや更新されない、またしばしば疎遠な本源的労働と、最後に流動資本とから構成される割合で成立する」（II. p. 216,（下）241頁）。シスモンディの所得分配論は、後述するように、自然率での価格構成論として説明されている。それ故に商品価値論もまた、新古典派を思わせるかのように、「生産費説」的な説明になっているのである。シスモンディは交換社会のもとでの富が「効用」という第一義的性格を一切はぎとられて、「交換価値」のみによっているという（岡田純一『前掲書』217頁を参照）。
- 8) ローザ・ルクセンブルグ（長谷部文雄訳）『資本蓄積論』中、青木書店、昭28、219頁。なお、シスモンディは第4編第7章で、分業により労働者がもはや「機械と同じであるにすぎず、機械にとって代われること」を語り、「分業の高度な所産も幾百億の人間の無形の犠牲によって購われるもの」と指摘する（I. p. 296,（上）302～303頁）。また第7編第7章「機械の発明により過剰にされる人口について」においても、資本主義における分業の作用（機械の発明と生産への採用）のもう一つの面に触れている。「あらゆる労働成果を一層少数の労働者使用でもたらす経済的方法が生み出されている」と（II. p. 211,（下）236頁）。
- 9) シスモンディは資本主義における「労働の低賃金」について述べている。それは熟練の獲得という労働者自身の形で固定化する国民資本に相応すべき「通常賃金」と「失われたフォンに対する賃子」とを補償しえなくしている（I. p. 296,（上）303頁）。
- 10) 堀新一『経済思想史』166～167頁。

3. 「資本と所得」概念と再生産

「資本はつねに貨幣をもって示されるとは言え、全く貨幣とは異ったもの」である（II. p.

15, (下) 21頁)。貨幣は「不妊なもの」であり「いかなる所得をも生じさせない」(II. p. 15, (下) 21頁)。だが資本は自己産出的で「一つの恒久的な増大する価値」であり、「もはや消滅することなき価値」「一つの超感性的な把握しがたい価値」として、常に同一事業者の所有するところとなっており、彼のためにそれはさまざまな形態をとるにすぎないものである(I. p. 92, (上) 104 頁)。

彼はまず資本を貨幣とは明確に区別し、資本を「超過価値(mieux value)」を恒久的に生み出す「超感性的」なものであるととらえ、資本のもつ物神的性格を感覚的に認識する。資本関係の根拠となる商品生産との関連性は不明である。このことは後にみることとして、シスモンディは、スミスと同様に、この超過的・追加的価値を、「前貸資本」の総価値を超える超過分として、そのかぎり「剰余価値を直接に利潤の形態で」(マルクス) 把握する¹⁾。従って、剰余価値生産の秘密に関する内的分析は、あいまいさを多く残すことにならざるをえない。また、この前貸資本についても、スミスとともに、二要素、すなわち固定資本(capital fixe)および流動資本(capital circulant)とから構成されるという(I. p. 95, (上) 107-108 頁)。固定資本とは「その所有者に徐々に消耗させて、労働をより有利に使用し、自然の盲目の力で人間労働を遂行させるために供される社会の蓄積した富の一部」であり、具体的には「開墾された土地、灌漑用堀割、工場、織機および全ゆる種類の機械」をさしている。流動資本は、「それが完成させる生産物のうちに再生産されるために急速に消耗し、等しい価値を保ちながらたえず形態を変えるべく運命づけられている部分」、具体的には「種子、労働対象の原料およ

び賃金」を意味する(I. p. 95, (上) 107-108 頁)²⁾。

前貸資本を投入して完成された生産物は、第三の富部分(超過価値)を含む(I. p. 95, (上) 108頁)。従って、資本の生産物価値の総体は、第一の富部分(固定資本の全利子)、第二の富部分(原料、労働者の全賃金、流動資本の全利子)および第三の富部分(これは固定資本および流動資本の利潤である)から構成されるという³⁾。素材的な把握ではあるが、シスモンディは、固定資本および流動資本(原料)の消耗、補填の問題を視野の中に入れている。不変資本の消耗、補填を利子という派生所得でとらえる彼の見地の吟味はしばらく措くとして、彼は、この「超過価値」の源泉をどのようにみるのであろうか。彼の叙述をもう少しみておこう。

ところで、生産物価値は全て欲求を充足する故にのみ存立するのであって、欲求は消費によってはじめて充足しうる(I. pp. 95-96, (上) 108 頁)。つまり人間の欲求は、所得を支払って購買する財集積(消費フォン)という媒介をえてのみ、生産物価値の総体を吸収しうるのである(I. p. 95, (上) 108 頁)。この消費フォンは国民所得によって度量される、と⁴⁾。

要約してみよう。シスモンディは、資本を、運動において自己を維持するだけでなく、「超過価値」を生み出すものとしてとらえる。貨幣(資本)の循環視角からみた資本観である。そこから一方では資本の生産過程における生産資本の内的構成をながめ、他方では社会的総生産物価値を所得流通とからめてこれを規定しようとしている。所得流通の見地からする再生産把握とでもいうことができるであろうか。V+M のドグマは、シスモンディにおいても、完全に

は克服されていない。『新原理』初版ではとりわけそうであった（例えば I. p. 89, (上) 102-103 頁）。だが、次の第二版での叙述に注意してみよう。「われわれは他の個所で、すべての富は労働の生産物であると叙べた。所得も富の一部分であるかぎり、この共通の始源に由来するものであるはずだが、しかもなお、土地と蓄積された資本と労働との三つの相異なる源泉に由来するものとして、地代・利潤および労賃の名の下に三種の所得を認めることが一般におこなわれている。良く注意してみると、この三分割は人間労働の成果への参加における三種の相異った様式であることが判明である」（I. p. 89, (上) 375頁）。

ここでは所得は「人間労働の成果」への参加というところへかたになっている。つまり、国民資本ストックから年々流出する価値財（年生産物）の全体が、それを構成する生産諸要素にどのように流通分配されていくのか、という問題が「欲求充足」の体系からとらえかえされているのである⁵⁾。

さて、国民所得は生産総体を吸収（消費フォンにおいて）する。この消費フォンとはいうまでもなく価値生産物部分である。生産物価値の構成部分のうち、資本からの所得（第三の富部分）および流通資本のうちの賃金部分（第二の富の賃金部分）とから構成される（I. p. 95, (上) 108頁）。前者（その実体は超過価値）は資本家の利得部分（産業利潤）——厳密に言うところと企業者の利潤と資本家の利子（I. p. 291, (上) 297頁）——および地主に帰する純所得（地代）部分とから構成される（I. p. 102, (上) 115頁）。さて、固定資本（過去の人間労働）は労働力能を与える生命たる「現在の人間労働」と結合されてはじめて「一つの膨張する力」を

もちうる（I. p. 101, (上) 114 頁）。賃金という消費フォン部分は、この現在労働にたいして支払われる資本価値部分であり、それは「労働者が労働に従事する期間中に消費する生活必需品と等価」である（I. p. 98, (上) 110-111 頁）。労働者の行う現在労働は、彼を維持する過去労働の結晶物からなるこの生活資料と等価の賃金部分より一層の価値（超過価値）を生む力を有するというのである（I. p. 101, (上) 114 頁）。

この主張は、いってみれば、資本生産力説にも通じるものである。この思考が、「すべての富は労働の生産物である」との見地と交錯して、剰余価値の源泉にふれる認識をひき出しているのである。それとともに、年生産物中に含まれる部分（「超過価値」）および賃金で表示される「生命から結果される労働力」とを構成内容とする国民所得（I. p. 102, (上) 115 頁）は、次のように再生産されねばならないと述べている。「有益な事業の企業者の行う事業は、（生産的）消費にはじまるが、この消費には一層豊富な再生産が伴われなければならない。なぜならば、この再生産は、加工された原料と、労働者が労働中に消費した生活必需品と、織機その他一切の固定資本が生産中に減耗した割宛高と、最後に利得とに相当するものでなければならないからである。製造業者はその生産物の中に、ただ原料だけではなく、彼の労働者の賃金部分と、その固定資本の一切の利子・利潤およびその流動資本の一切の利子・利潤を見ださなければならない」（I. p. 98, (上) 111 頁）。だが、蓄積部分は究極的にマクロ集計として、所得に分解されるというのである⁶⁾。

こう述べて彼はまた、年所得は年生産と等量でなければならないという。だが彼は、「労働

力は富と比較し通約しえない」と注記している (I. p. 102, (上) 115頁)。

賃金は「労働者階級の生活資料」である。しかしそれは「労働の絶対量」＝再生産力の総体である人間力能の現在総量を表示しない。単に「前年の労働者を維持するに足りた生活資料の量」であるにすぎないというのである (I. p. 102, (上) 115頁)。この生活資料の量が今度は、次年の多少ともに大きな労働の量を動かすことになる。従って、諸国民の富の増大と減少、生産的階級の安定と窮迫、人口の増大と減少ということは、この賃金に表示される現在労働量と過去生活資料量との間における、二つの価値評価の変動として把握される (I. p. 102, (上) 115-116頁)。だから無制限な生産を奨励する人々 (セイ, リカードゥ) の誤謬は、彼らがこの過去の所得を将来の所得と混同しているところに由来する、ということになるのである (I. p. 113, (上) 126頁)。

同様に国民所得も現在と過去との二つの量からなることになる。前者は労働者の「意志と能力」であり、これは労働機会の現存ならびにこの能力と過去労働の成果たる消費対象生産物との交換とによって始めて「真実の富」になる主観的存在量である (I. p. 103, (上) 116頁)。後者は、利潤部分であり、現実消費を欲する人々の手中に生産物として存在している前年におこなわれた労働の成果そのものである (op. cit.)。この年所得の総体が年生産の総体にたいして消費フオンとして交換に付される部分だけ、年所得は年生産の総体を購買しようということになる (I. p. 103, (上) 116頁)。

このことの内容を、国民経済の「進歩的狀態」ないし「静止的狀態」と彼が呼ぶ内実とからめて、確かめてみよう。「それはつねに所得

の進展のうえに基礎づけられ」 (I. p. 245, (上) 249頁) で考察される必要がある。

「進歩的狀態」。これは、その国民が同時にあらゆる方面に発展させられていて、新しい土地や、以前に等閑に附していた土地を耕作し、彼らのために用意される全ゆる種類の衣料・家具・住宅・享楽に支払い、そしてそれらを将来の用意に一層需要することの可能な状態にあることをさしている。この状態にある限り、国民は何の懸念もなく資本を蓄積することができる。その蓄積は将来の世代の上に新しい恩恵を拡大することもできる (I. p. 248, (上) 252頁)。資本を蓄積し、唯一の新たな富を創造する節約は、つねによいとは限らない。つまり、資本蓄積による投資の作用は、雇用の増大と労働生産性の向上を促しはするが、それには貯蓄にとって有利な場所が与えられていなければならない (I. p. 247, (上) 252頁)。だが、需要の前提をなすものは、「消費に向けられる新たな所得の形成」である (I. p. 258, (上) 265頁)。別のいいかたをすれば、「新たな所得と交換されるあらゆる消費」が「新たな繁栄の源泉」である (I. p. 269, (上) 276頁)。

この「新たな所得」は、④「節約により新たに形成される固定資本と流動資本が必要される新たな生産物を生産するように適切に使用される場合」に、これらの資本から生じる。また、⑤「流動資本が必要に応じておこなわせる新たな労働」からも生じるのである (I. p. 270, (上) 276頁)。

「静止的狀態」。貯蓄による投資に有利な場所が全くない場合には、節約は見合わせる必要がある (I. p. 247, (上) 252頁)。この場合、国民は食糧の総量を各人の分け前水準以下に引き下げるか、過度の労働によってそれを獲得する

以外には増加させえない。各人に同一賃金でより激しい労働を強要する外に商〔工〕人口を増加させることはできない。その生産物の集積をその生産物の増加と同じテンポで増加させえない所得と交換しうるにすぎないのである。そして、その国民は、その資本ストックにより資給すべき事業に一層巨額な資本の充用をまったく求めえない（I. p. 248, (上) 253頁）。彼は経済成長を資本蓄積に依存させているが、この前提条件として需要の開拓をあげているのである⁷⁾。

彼はまたこうもいっている。活況期では、富者はその資本に追加する必要のために、彼の所得から節約をおこなう。このことは雇用の増加をもたらし、労働者、貧者もうるおうことができる（I. p. 104, (上) 117頁）。資本家が産業の年生産物の中の大半を労働と交換に労働者に与え、労働者の所得はそれだけ増加されて、人口の増加を阻む貧困から解放されることになるのである。この場合、労働者は単に彼の労働と交換に生活資料の一層大なる部分を受けとるだけでない。彼の与える労働・所得もそれだけ増加するのである。労働者は労働需要にもとづく利益をえることができる（I. p. 104, (上) 117頁）。だが、こうした活況期は恒久的ではなく、国民経済の現実の発展は必ずしもバランスのとれたものでもない。資本蓄積（貯蓄→投資→所得）のテンポは、他の諸条件、とくに利子率との比率において、活況状態の調和をつき崩すのである（I. pp. 20-21, (上) 361頁）。リカードたちは、この不均衡が価格運動の自律性による生産の一層望ましい方向への転換によって脱出できると考えた。シスモンディは、資本と労働の「移動」（つまり流動性）の困難なことをあげて、この不均衡の調整をスムーズにはいた

らしめない事情を次のように説く。その論拠はほぼ四点にまとめることができる。

①利子率は平均化し、自律的調整の作用を有し、また平均利子率は低下傾向にある（I. pp. 291-293, (上) 298頁）。②利子率の低下はほとんど常に製造業者をして、固定資本の使用比重の増大による生産物価格の低下を図らせる（I. pp. 293-294, (上) 300頁）。③だが過剰資本の調整はスムーズにはいかず、節約による資本の新たな形成が過剰生産をもたらし、資本の増加は必ずしも相応の所得、消費の増加をとまなわない（I. pp. 304-305, (上) 312-313頁）。④ただし、個別生産者は需要一般によってではなく、使用資本量によって活動を比例されており、商人は競争による販路拡大のために新たな所得との交換という配慮を欠き、また市場状況に応じて生産を縮小することも同様に困難である（I. p. 305, (上) 312-313頁）。

資本蓄積は所得からの節約により、あるいはまた有効需要の創造により実現され、社会は進歩する。しかし、これは恒久的であるのではなく、それ自身の矛盾にもとづいて過剰資本をつくり出す。というのは、資本主義は活況期の恒常を保障していない。しかし、とはいいいながらも、この期には、分配の不平等が幾分是正されることにより、その背後にある資本と労働の間の「本質的關係」を見ることが許される（I. p. 107, (上) 119頁）。資本の利潤ならびに労働自体の二つの所得は、時期を異にしてはいても、国民所得の分配にかかわる人々の間における権利に基づいた連帯と均衡の關係を表示している⁸⁾。「労働者は新たな現在労働によって新たな権利をそこに獲得し、他の者（資本家）は年労働を一層有利たらしめる本源的な過去労働によって、前もってそこに恒久的な権利を獲得

している」(I. p. 107, (上) 119頁)⁹⁾。勿論、この「資本と労働の協働」になるものは、「人為的組織」の結果のそれである。それは「人間の本性の結果」でもなければ、「労働の本性の結果」でもないのである(II. p. 232, (下) 257頁)。資本主義のうちでもこうした「本質的な関係」が神による摂理として存在しているものだとでも、彼は言うのであろうか(II. pp. 232-233, (下) 258頁)。「われわれが採用した社会組織のうちでは、すべての労働は富を所有する者と、富を運転する者との二大階級の不断の協働によっておこなわれる。いかなる事業といえども、富と産業労働なしにはもたらされない。労働者が自分に支払う富者にとって必要であるということは、あたかも支払人が労働者に必要であることと同様である。一方が他方を生活せしめるのであって、それ故に彼らの間には、一種の連帯が存在するか、少なくとも存在しなければならないのである」(op. cit.)。富者はあくまでも、彼が労働者に与える「助力」の代償として労働者の労働に協力するものであり、従って労働者に対して彼がその消費を超過して生産したものの一部を留保する、という関係にとどまるべきである、と(I. p. 90, (上) 376頁)。前に述べたシスモンディのいう「連帯の原理」であり、貧者の立場からいえば「参加の原理」である。この原理は、前節でみたように、人間本来の性質に根ざす市民的権利であり、従って資本主義のもとでも貫徹されねばならない原理なのである。シスモンディ経済学の原理でもあるのである¹⁰⁾。

注

- 1) 中村賢一郎『経済学史』学文社、昭50、116頁。
なお、スミス『前掲書』、訳第一分冊、114頁を参照。
- 2) Marx, Grundrisse, S. 541 (『要綱』第三分

冊、596頁)。

- 3) 堀新一『市場論』税務経理協会、昭31、90～91頁。
- 4) 平田清明「スミスとシスモンディ——経済的不調和の問題」『経済学説全集』第二巻、河出書房、昭29、269頁。
- 5) 堀新一『フランス経済思想史』166～167頁。また、J. モリニエにおける所得概念の学史的素描も参照(『前掲書』8～11頁)。中野正教授もフランス学派の原理解明を試み、所得概念の意義に言及している(『前掲』123頁)。
- 6) 堀新一『市場論』90～91頁。
- 7) 岡田純一『前掲書』176頁。
- 8) 中野正「前掲」124頁。なお、次のシスモンディの言葉にも注目したい。資本主義では、富者は「正義の本質的原理」(連帯の原理)に反している。「今日みられるように全ての貧者が一様に公共慈善の負担にゆだねられている混乱のうちでは、例えば慈善がイギリスのように法律によって規制されているにせよ、他の国のように人間性の発露にゆだねられているにせよ、各人の富者は貧者を社会におしつけ、彼らの状態を深刻にするように努めて、あるいは租税、あるいは人類愛によって自らに課する自発的な献金によって、この社会の一員としてただちに彼らの救済に赴かねばならないとは考えないのである」(II. p. 235, (下) 261頁)。ブルジョワジーへの深い絶望にもかかわらず、シスモンディは「連帯の原理」(共同性)の社会的意義を見失うまいとしていた。
- 9) 吉田静一『異端の経済学者シスモンディ』新評論、昭50、198～200頁。
- 10) 岡田純一『前掲書』176、182頁、Аникин, там же, стр. 18～19.

4. むすびにかえて

シスモンディ経済学は国民所得の循環の見地からとらえた再生産論である。その際、彼は自分の学的公準を「富の蓄積」自体にではなくして、「富の意味する物質的生活への享楽」に全国民が参加する方法の考察においている。そのかぎり彼の経済学は規範的であるといえる。彼はいう。「国民所得は国民支出を規定し、後者

は消費フォンとして生産の総体を吸収する」(I. pp. 108-109, (上) 120頁)。この場合、国民の絶対的消費が等一、あるいは更に大なる再生産を規定すべきである。けだし、この再生産から望むべき所得が生じるのであるから (I. pp. 108-109, (上) 120頁)。

ここで、先学のシスモンディ評価にふれて、それを位置づけてみよう。一解釈はいう。「シスモンディは拡大再生産にも気づいているが、それへの橋わたしは消費の増大である。これはケネーに比べてかえって一步の後退であり、現実社会を『経済表』に合うように規定する以外に、シスモンディには道がのこされていない」言々¹⁾。他方、岡田純一教授は、所得原理にもとづくシスモンディ再生産論に注目され、彼が消費拡大一有効需要創出を国民経済の拡大再生産と発展とにたいする重要な前提条件であると看破し、均衡回復のシェーマを説き明かしえたと評価される²⁾。たしかに、シスモンディの再生産シェーマは、 $y' = y_0(1+r)^t$ [所得 y の年生産率 r として] という複利的螺旋型の成長過程を説明しているのである。アニーキンもまた、この面におけるシスモンディの功績に注目している³⁾。

すでに述べたように、シスモンディがこの所得原理を国家の干渉の論拠として提出しているところにわれわれは関心をもった。彼は国家の干渉を「人口一富」の関係(結合と均衡)の視角から、国民経済再生産にたいする主導的要因とみなしている。この場合所得概念は、国民経済の拡大再生産の中に「最善制度」の模型を見出して、福祉達成の経済革命をアプローチしていくための説明原理となっている。ここに彼の

経済学の画期的意義があるといえるのではなかろうか。この原理にもとづいて、彼は「分配是正」を提唱し⁴⁾、「豊富の真只中の貧困」の要因をさぐりだし、国家による干渉の意味と範囲を提唱した。具体的に彼は、①所得の平等分配と賃金上昇 (I. pp. 283-284, (上) 283頁)、②節約と投資の限定性への公的配慮 (I. p. 294, (上) 300頁)、③租税における資本と労賃の保障の問題 (II. pp. 113-114, (下) 131-133頁)、④貧者の保護 (II. p. 244, (下) 270頁)、⑤消費者の欲求が発達させる新しい工業の育成 (II. p. 245, (下) 272頁) 等々をあげているのである。

それにしても彼のこの原理認識の出発点には、先学の指摘にもあるとおり、ロマン主義的な小商品生産への回顧が絶無だとはいえないことも事実である。だが、このことがかえって、彼のこの再生産論に規範的なものを内包させて、一層強力な現実批判の武器に転化させているのである。そしてまた、そのことが、アニーキンの目にとまり⁵⁾、ロシア経済思想史研究の有力な手掛りとしてとりあげられたのであるが、これはいま残された課題である。

注

- 1) 堀新一『市場論』第四章を参照。
- 2) 岡田純一『前掲書』179～183頁。なお、吉田教授の解釈もユニークである(『前掲書』170頁)。
- 3) Аникин, там же, стр. 26. 中村賢一郎『前掲書』184頁。
- 4) Sismondi, tome II. p. 244, (下) 301頁のヴィジョンとそのための施策の基調についての言葉も参照。
- 5) Аникин, там же, стр. 17.

(1975. 7. 2 脱稿)